

## 第2章 卒業式

### 1.人々は儀礼文化にいかなる感動を求めてきたのか

#### —「涙の卒業式」を事例として—（Ⅱ）

大道 晴香（冠婚葬祭総合研究所）

##### 1. 問題の所在

人間の成長に応じて一生のうちに行われる「人生儀礼」は、戦後の社会変動の中で大きく変化してきた。近代以前より営まれてきた複数の行事が廃れ、また、結婚式や葬儀、七五三といった存続儀礼の形式と価値が再生産され続ける一方、地域を基盤とした共同体とは異なる社会的共同体に依拠するかたちで、幾つかの行事が新たな人生儀礼の位置を占めるようになってきている。その代表として挙げられるのが、教育制度の中に組み込まれた学校行事である。

人間の成長を主眼とする教育の場においては、様々な通過儀礼が設定されてきた。最近では、成人の2分の1に当たる10歳を記念した「二分の一成人式」が急速に普及して話題となったが、やはり国民の大多数にその体験が共有されているのは、戦前より広く執り行われ、学習指導要領にも記載のある「入学式」と「卒業式」であろう。なかでも「感動」や「涙」との結びつきが強い「卒業式」は、その形式に感情の表出装置としての役割が期待される点、また、親族というもう一人の儀礼の享受者の存在が想定される点において、今日のセレモニー産業とも浅からぬ繋がりを有する行事だと言える。

本研究では、そうした卒業式が持つ「感情の共同体」という側面に着目した、有本真紀の『卒業式の歴史学』（講談社、2013年）を基礎とし、有本が明らかにした戦前の状況に続く戦後の卒業式をめぐる動向を通時的に探究することを目的としていた。我々が慣れ親しんだ「感情の共同体」であるところの卒業式は、戦前の国民教化に淵源を持つものである。しかしながら、「感動」に対する希求は、国家主義に基づく教育方針が消失した後も失われるどころか、むしろ高まっているようにさえ見受けられる。確かに、現行の卒業式の祖型が形作られたのは戦前の流れの中であったが、教育改革と社会変動に依拠した子ども観の推移のもと、戦後の歩みにおいても、卒業式の様相は今日に至るまで目まぐるしい変化を遂げてきたものと推測される。

昨年度は、『朝日新聞』の記事を対象に、1945年から1960年代までの卒業式の動向を、「感情」の扱いに着目しながら跡付けてきた。「忠君」の要素を脱落させつつ、戦前より形式の引き継がれてきた卒業式への懐疑の声が上がったのは、1950年代後半のことである。この時期に高まった「旧形式からの脱却」という論調には、（1）「個人頭彰の撤廃と個々の尊重」、（2）「式の簡略化」、（3）「子ども本位の儀式的創出」、という三つの動向を見て

取ることが可能であったが、これらはいずれも「子ども本位」という同根の教育理念のもとに発生した現象であった。「子ども」の主体性に目を向けた戦後の教育改革の中で、「形式」としてのみ残存してきた卒業式は、「子どものための儀式」として再誕したわけである。

ただし、ここで言う「子どものため」が、「子ども主体」と同義ではなかった点には注意が必要であろう。1960年代後半から苛烈を極めた学生運動の戦場としての「卒業式」は、他ならぬ、この「子どものための儀式」の延長線上に位置していたものとみられる。

## 2. 「卒業式」という名の戦場 - 学生運動の時代 - (1960年代後半～1970年代前半)

『朝日新聞』のオンラインデータベース「聞蔵ビジュアルⅡ」を使用し、「卒業式」のワードで記事の検索を行うと、1965年から1980年代までの期間に関連記事は、合計で312件確認することが出来る(【表1】)。うち全体の約3分の1に相当する116件が1968年から70年の期間に集中しており、前年に12件だった記事は、68年に突如約2倍の25件まで急増すると、69年には59件まで達し、70年に32件となった後は、例年並みの件数に戻っている。この推移は東大闘争・全共闘の高まりと軌を一にするものであり、言わずもがな、当該期の記事の殆どが学生運動がらみとなっている。

1966年の横浜国立大学学芸学部を筆頭に(【表1】の【No.9・10】。以降、【】内の数字は全て表1の記事番号を示す)、大学側と学生との軋轢に基づく卒業式の中止や延期、混乱が顕著となり、1968年には、ついに東京大学が安田講堂の占拠によって卒業式を取りやめるに至っている(【40・42】)。周知のとおり、1969年1月には安田講堂事件が勃発し、東大は二年連続で卒業式が中止となったばかりか入試も停止され、入学者0という異例の事態となった(【69】)。この安田講堂事件を皮切りに全共闘の波は全国の大学へと拡散し、1969年には全国各地の大学で卒業式が中止もしくは妨害の憂き目にあっている。1969年の記事を見ると、大学にもまして高校の卒業式の混乱を報じる記事が32件と多くなっており、中学校も2件(【74・88】)含まれているなど、学生運動の高まりが大学以外の卒業式にも大きな影響を及ぼしたことが分かる。ただし、1970年を最後に求心力は驚くほど急速に低下したと見え、1971年の記事は僅か3件にまで減少している。

記事数を概観してみても分かるように、卒業式は、学生が学校側と闘争するにあたって格好の「戦場」となっていた。そうした「戦場」としての卒業式で、学生と学校双方にとっての中心課題となったのが「主体性」である。この「主体性」をめぐる動きで最も分かりやすいのは、「自主卒業式」の発生であろう。

### 2-1. 「自主卒業式」の発生

卒業の式典そのものを学生が大学とは独立に主催する「自主卒業式」の嚆矢は、1966年の早稲田大学の例に求められる(【11】)。進行中の係争に絡み、全共闘が「卒業式を抗議集会とし、学生に司会をさせ、大学当局への質問を許すよう要求」した同大では、「大学当局は卒業式のなごやかなムードがこわされ、参観の父母たちを混乱に巻き込みかねない」

との理由で、同年の統一卒業式を取りやめている。当該記事には常任理事の「トゲトゲしい空気の中で、魂の抜けた卒業式をやっても意味がないと考えた」とのコメントが掲載されているが、「魂の抜けた卒業式」という表現は、前掲の「卒業式のなごやかなムード」と重ね合わせて見た場合、大学側が卒業式に対して何かしらの理想、すなわち「あるべき卒業式」像を抱いていることを示唆する点で非常に興味深い。そのうえで、大学側は学部ごとに卒業式をしてはどうかとの代替案を提示し、中止を決定する学部もあれば、教員が「学生を送る会」を企画する学部もあるといった具合に、銘々の対応がなされた。これらの動きの中で学生主体で自主的に実行されたのが、早大全学四年生連絡会議による統一総括卒業式である（【13】）。記念講堂で行われた当式典には、2000人の学生が参集したという。

統一総括“卒業式”とはいうものの、その内実が“総括”だったことは想像に難くない。もともと学生側の要求が、卒業式の抗議集会化であった点に鑑みれば、ここでの「卒業式」とは、あくまで全学式典の中止と小規模分散による抗議集会の封じ込めを、統一卒業式の復活によって切り抜けるための、方便に持ち出されたに過ぎなかったようにも見える。とは言え、「卒業式を抗議集会」とする要求が「学生に司会をさせ、大学当局への質問を許す」という式典の実質的な運営の在り方と不可分であったように、式への抵抗が「大学」から「学生」への主体の移行、ないし「学生による主体性の奪還」といった意味を持ち得ることを考えれば、「自主卒業式」は学生運動の文脈における「学校 VS 学生」の構造上に位置した、卒業式の主体性をめぐる攻防として捉えることが可能であろう。これは翻って、「子ども本位」の方向で進んできた卒業式の主体が、学生のもの（もしくは、学生だけのもの）ではなかった状況を物語っている。

大学側の方針に対する対抗手段としての「自主卒業式」は、学生運動の高まりと随伴して各地で見られるようになった。1967年には学費紛争のあった明治大学で、学苑会（夜間部学生自治会）執行部を中心とする強硬派の学生達が、日本武道館で行われる学校主催の卒業式に反対して「自主卒業式」を計画、実施したと報じられている（【19・22】）。また、同年の高崎経済大学では、学生運動の混乱を危惧した大学側が学外での卒業式を企画したものの、学生自治会がこれに反対。同日に学内の教室で「卒業生を送る会」を開いたとされる（【23】）。ただし、学校主催の式に卒業生約200人が出席したのに対し、送る会の参加者が卒業生10余人と在校生約100人だったように、学生代表の体を取る学生運動が、決して全ての学生の総意でなかった事実には留意が必要だろう。

## 2-2. 送辞答辞のすり替え

こうした生徒自身の手による「主体性」の奪還は、「自主卒業式」という形以外にも、現行の式典の一部を改変し、予定調和を崩すといったやり方でも試みられた。その最たるものが「答辞」ないし「送辞」のすり替えである。答辞と送辞とは、卒業式において生徒に唯一発言が認められる機会、より踏み込んで言えば、教員主導下で形式として生徒の“主体性”が認められるシーンである。この体制側から付与された筋書きありきの“主体性”が、体

制に不満を持つ者の感情表現の場に選ばれたのは、当然の成り行きだったと言えよう。

「答辞」「送辞」のすり替えが新聞上で可視化されたのは、1968年のことである。その嚆矢は、福島県の県立高校での送辞すり替えを報じた【28】であるが、同年の【30】に「昨年は市川市の高校で『紅衛兵礼賛』をやった卒業生の答辞が話題となったが」の文言が見える点に鑑みれば、実際には、学生運動の兆しの表れ始めた1、2年ほど前から同様の現象は生じていたものと推測される。

#### 1968年3月2日「事前提出の送辞すりかえ 激しく政府攻撃」【28】

在校生総代同校二年生S君は、高校教育の受験予備校化、自民党政府の反動化を激しく攻撃し、ベトナム反戦を訴えた。この送辞は事前に学校に提出されたものと全く違っていたため、学校では同日、臨時職員会議を開いて善後措置を協議した。

職員会議では、送辞がすりかえられたことは遺憾で、卒業式の送辞にはふさわしくない内容ではないか、としながらも、送辞の中で述べられた学校、教師に対する不信感は、教師が謙虚に反省し、生徒の個人指導を徹底することなどが話合われた。

当該記事において、学校側は提出された本校や教師に対する不満については真摯に受け止めつつも、この送辞が「卒業式の送辞にはふさわしくない内容」であるとして、遺憾の意を表明している。卒業生に向けてのメッセージであるところ送辞は在校生の主義主張のための場ではない、また、在校生代表の立場での発声を私物化すべきでない、といったもつともな理由の存在することは想像に難くないが、ここで注視すべきは、むしろ、卒業式の送辞には「ふさわしくない内容」＝「ふさわしい内容」が暗黙の裡に存在しているという事実であろう。これが前述の早稲田大学で浮上した、「あるべき卒業式」像と重なってくることは言うまでもない。

こうした「ふさわしい内容」の存在が、他の学校行事にもまして「卒業式」で特段の問題となってくるのは、他でもない、①卒業式が持ち合わせる“感情発露”という個人の内面に踏み込んだその特異性と、②“卒業生のため”という「学生本位」を標ぼうしつつ、実質的には教師・保護者という儀礼の担い手および受容者が存在する、「卒業式は誰のものか」をめぐる問いのためである。これら二つの文脈に置かれた時、送辞や答辞に見る「ふさわしい内容」の存在は、①思想・心情への介入・統制＝「実心情」と「形式」との乖離、②体制側からの「形式」の押し付け＝主体性の剥奪、という二つの意味で、送辞や答辞が“意味のない形式”に墮してしまう可能性を孕むものであった。であるからこそ、既定路線の送辞や答辞の“粉碎”は、主張の内容もさることながら、予定調和を崩す行為自体が①②の否定を意味する点で十二分な価値を有していたのであって、ゆえに、送辞や答辞は学生にとって格好の標的となったのである。

送辞と答辞の場合も、その混乱は学生運動の盛り上がりと共に全国に広がり、やはり高校から中学へ飛び火したことが分かっている（【74】）。現行式典の一部を乱す行為として

は、他にも「卒業証書を破る」(【58】)、「式の途中で卒業生が退場」(【59】)、「校長批判のたれ幕」(【63】)等が確認されるが、予定調和の攪乱という点では、これらも同様の価値を帯びた行為だったと解してよいだろう。

### 2-3. 新たな儀礼の創造

「自主卒業式」の開催、また式典の一部改変は、学生運動下という特定の文脈で意味を持つ特殊な出来事である。したがって、人生儀礼一般としての「文化」のまなざしで眺めた場合、これまで述べてきたような卒業式の諸相は、一時的な特殊事例と見られてしまうかもしれない。そうした中で見逃せないのは、1969年の麻布高校での送辞すり替え騒ぎである。

#### 1969年3月8日「すりかえ“送辞”で騒ぎ 東京・麻布高の卒業式」【61】

同校ではことしから、送、答辞の文案に生徒の意思を代表させることにし、送辞は在校生の投票で選んだ五人と、生徒会代表二人の計七人に原案をつくらせた。これに教員が意見をのべ、二回の修正で“送辞”の文章をきめていた。ところが、式場で在校生が読んだのは、修正前の原案の文章だった。答辞の文章も、生徒代表十二人の案に先生の意見を加えてつくられたが、授業への不満、その改善要求に先生が消極的だった点などを鋭く批判している。

送辞すり替えは、既に述べてきたとおり、麻生高校だけに特異な出来事ではない。だが、すり替えられる前の送辞と答辞の文案が、学校公認のもと、投票で選出した生徒代表や生徒会の代表とによって原案が作成されていたことは、注目に値する。教員の意見を反映しており、送辞に関しては、最終的に完成稿が破棄されてしまったわけだが、生徒による送辞・答辞内容の自主作成の公認は、旧形式に対する反省と生徒・学生の自主性に基づく新たな形式の創造という点において、同時代的文脈以上の意味を有するものであったように思われる。

例えば、同年の卒業式で答辞朗読者が二人出て混乱の生じた大阪府立東淀川高校では、「生徒側から出ていた①答辞は生徒が自主作成②朗読者を生徒自身が選出する、の要求二項目を来年度から全面的に実施する」と生徒に通告している(【60】)。

また1969年の都立大学付属高校の卒業式では、討論会スタイルの「新しい形式」の卒業式が計画されていた(【65】)。生徒代表が議長となり、卒業生代表、在校生代表、校長の順に討論のテーマを提出。それらについて一時間半の予定で自由討論。討論終了と同時に校長が各クラス代表に卒業証書を渡し、校歌斉唱で式を終る、というのが、具体的な式典内容である。発端は生徒側から提出された「来賓や父兄向けの形式的な卒業式ではなく、卒業生を主体に」との要望で、これに校長が「祝辞、答辞がそれぞれかみ合わない話をいい捨てる意味がない。三年間の高校教育の総括を論じ合おう」と応じたことで持ち上が

ったこの計画は、校長をまじえた教員サイドと、各クラスから選ばれた生徒で構成される、「卒業式委員会」との十数回に及ぶ話し合いを経て、確定に至ったという。

だが、残念なことに、前夜からの生徒による校舎占拠によって、討論型卒業式は実施の日の目を見ることはなかったようだ（【84】）。ここには、「教師側の論理への回収」と「与えられた自主性」という公認化が持ち合わせた性質と、その点を考慮した際の「自主性」を実現することの難しさが現れている。

「生徒主体」を重んじた新たな形式の提示は、送辞答辞以外の形式にも確認される。告辞や授与式を全撤廃し、卒業式自体を「総括集会」にすることを決めた宮城教育大学のよ  
うな例もあるが（【130】）、生徒にとって積極的な意味を持たない形式を排除する「簡素化」  
の方向で舵を切った学校も少なくなかったようだ。

### 1970年2月23日「卒業式は生徒本位に “改革”にチェシぼる高校」【118】

三月に行われる東京とその近県の各高校では、生徒の意向を入れて生徒本位の卒業式をする傾向が目立つ。その結果、全体として祝辞を減らすなどの「簡素化」の方向とともに、討論会形式や複数答辞、さらに式をやめてお別れパーティー、クラスごとの分散卒業式など“多様化”ぶりがきわだってきた。

都立駒場（三月六日）は「簡素化」の見本になりそう。生徒の希望で、祝辞はもちろん、答辞、送辞もやめ、卒業生の名前も呼びあげない。各クラスの代表に卒業証書を手渡すだけ。所要時間は「さあ、二十分くらいでしょう」（中略）

東京の私立麻布は式をやめてしまった。代わりに二月七日、先生と卒業生のお別れパーティー。（中略）都立文京（十日）もお別れパーティー案が有力。

「簡素化」を突き詰めた結果、「卒業式」は身近な人々で気楽に、堅苦しい形式抜きに楽しむ「お別れパーティー」スタイルへと姿を変えている。これはつまり、従来の卒業式という儀礼そのものが、生徒にとって意味を持たない「無駄な形式」だったと判断されてしまったことになろう。だが、従来の形式を排除した、フリースタイルという名の形式が、果たして人生儀礼に相応しい、心に刻まれる豊かな“節目”の経験を提供出来たかについては、疑問が残る。

### 1970年3月11日「昔 仰げば尊し 今 エレキ 文京高卒業式」【129】

十日、豊島区のと都立文京高校の卒業式にエレキバンドが登場した。

午前十時半、校歌斉唱。（中略）校長が、昨秋の紛争にふれ「あの体験をムダにしないで、長い人生のどこかで花を咲かせてほしい」と五分余りのあいさつ。ジュースやケーキの並ぶ体育館で生徒たちは壁にもたれて勝手なおしゃべり。前夜のマージャンの戦績を誇る生徒もいた。

型通りに、父兄代表の卒業記念品贈呈が終ると、数人の男生徒がステージにのぼり、エレキギターが鳴りはじめた。ため息をついていた母親たちも、いつかとけこみ、まわりの生徒に「さあ、たくさんめしあがれ」

卒業式における「生徒主体」は、もともと学生運動の中に生じた「主体性の奪還」という能動的なモチベーションに基づく議論であった。しかしながら、上記の「お別れパーティー」のような方向性での「簡素化」は、「学生にとって意味のある儀式とは何か」そして「自分たちにとって意味のある儀式とは何か」といった学校と生徒双方の能動的な希求に裏付けられているというよりかは、むしろ、「やりたくないことはやりたくない」という学生側の我儘を、大人の側が聞き入れて（もしくは付度して）実現して“あげている”ような、単なるご機嫌取りになってしまっている感が否めない。こうした状況は、とにかく従来の形式をなくせばよい、旧態を打破すればよいといった姿勢が、根本的な解決には結びつかず、打開策を提示するに至っていなかった実情を暗示している。

ただし、「生徒主体」を受けた旧態の見直しは、「簡素化」の方向にだけ向かったのではなく、同時に形式としての儀礼自体が持つ意義の再考や、新たな儀礼の「創造」に向かった点で、儀式文化の流れにおいても一定の価値を有する動向であったと言える。以下の記事は、いずれも卒業式を始めとした人生儀礼に認められる「形式」に着目し、その観点から学生運動に揺れる卒業式について考察を図ったものである。感情に重きを置く卒業式の「形式」が、生徒・学生たちの内実と乖離し、「意味のない形式」になっていると推察し、今日生じている混乱がそうした卒業式の特徴に依拠しているとする分析眼は、どちらも非常に鋭いと言える。とりわけ二番目の記事は、「簡略化」がかえって生徒の内実と形式との乖離を加速させているとし、そのうえで、形式の必要性和新たな形式の創造を提言する点で注目される。

#### **1969年3月16日「なぜ荒れる高校卒業式 形式主義へ反発」【84】**

先生の号令の下に、何十年来続いてきた卒業式。あのふん囲気を、大人になってもなつかしく思う反面、あまりに儀礼ばったやり方に感じた反発の気持を思い出す人も多いだろう。

最近の活動家が卒業式を紛争の舞台にねらうのは、この反発が高校生全体にあるからだ。いまの高校生はこの反発を「卒業式の権威主義、形式主義反対」と表現する。（中略）都立大付属高でも、生徒たちの最初の要求は「生徒主体の卒業式を」だった。

#### **1973年3月5日「今日の問題：卒業式」【155】**

一体に、若者たちは、儀式といった形式的行事をひどくきらう。たしかに、大人から見てもわずらわしい、形だけの儀式は現在もたくさんある。だが、人間生活に一つの区切りをつける意味や、社会的な表示の行為として、そういう儀式の必要なことも皆無ではない。

ただ、儀式というものは、旧来の形式を踏襲していくところにその本質があり、そのため、とかく実体と遊離してしまいやすい。若者たちはその点に敏感なのだ。だから儀式は時代とともに、その形を変えて行かなくてはならない。

もちろん、卒業式も変って来てはいる。長ったらしい来賓の祝辞など、どこの学校でもやらなくな

った。トラブルをさけるせいもあってか、なるべく簡略化して、三十分ぐらいで終わるところもある。しかし、そのために、かえってお座なりの形だけのものになったともいえる。

生徒たちにしても、長い学寮生活を終るにあたっての「行事」を全くいらぬというわけでもないだろう。生徒たちの意見もとり入れ、新しい時代にふさわしい形のものを与えてやれば、あるいは素直に参加したとも考えられる。

とは言え、戦前からの形式が戦後になってもそう簡単に改められずにきた経緯、また、主体性の奪還を訴えた形式打破の先に、学生が権力への抵抗もしくは総括という既存の形式以外に、自らの卒業式を構築出来ていない現状に鑑みれば、「生徒主体」を実現する新たな儀礼の創造がいかに容易ではないかが分かるだろう。以下の記事に見る「破壊はやさしいが創造はむずかしい」というコメントは、卒業式という文化ひいては学生運動の特徴を言い得ているように思われる。

### 1970年3月8日「ミニ・ドキュメント：都立北多摩高の自主卒業式」【126】

昨秋、バリストがあった都立北多摩高校の卒業式が七日午後、立川市社会教育会館で行われた。生徒会が卒業準備委員会をつくり、約一年間討議を重ねた結果、司会、進行は三年生がやるなど、かなり自主的な要素を盛り込んだプログラムになった。

右後部座席に陣取った十人近くの生徒が叫ぶ。「卒業式粉碎」「何が自主的なんだよ」「卒業っていったい何なんだよ」

準備委員長「破壊はやさしいが、創造することはむずかしい。どうかじゃまをしないでください。生徒、父兄から拍手が起きた。

なお、前掲記事でも「粉碎派」は全体に対して十人ほどしかいなかったと記しているように、旧態的な卒業式の打破を強行する生徒・学生は一部の者、もしくは地域や学校によってかなりばらつきがあったことは、忘れてはならないだろう。記事にも「こうした傾向とまったく逆に、都立三田（十五日）では生徒が『従来通りの式次第で、“仰げば尊し”も歌いたい』といい出し、先生が驚いた。卒業式の変り方が目立ち出したのは昨年からだが、従来通りの式をする高校もかなりの数にのぼりそうだとあるとおりに、おそらく量的に見れば、従来と変わらぬ式を執り行った学校の方が多かったに違いない。むしろ重視すべきは、「従来通りの式次第で、“仰げば尊し”も歌いたい」という意思表示が生徒の側から出されていること、すなわち、卒業式のあり方や形式の意義を今一度見つめ直す機会が与えられたことであつたかと思われる。

### 3. 「卒業式」をしたい - 戦争が奪った人生儀礼と仲間 -

以上に述べてきたとおり、学生運動の季節の中で卒業式は、「感情の発露」と「子ども本位」という当該儀礼に内在した特異さゆえに、“権力による押し付け”の象徴として、その旧態的な形式の打破もしくは見直しが図られるようになった。戦前から引き継いできた形



式は、ここに来て「意味のない形式」と見なされたのであり、時に儀礼自体の存続にも関わりながら、卒業式は従来の形式に対して何らかの見直しを迫られることとなった。

ところが、こうした学生運動の時期に、一方で旧態的な形式と卒業式の開催自体を心から切望した人々がいたことを忘れてはならないだろう。それが、戦争によって卒業式の機会を逸してしまった戦災の被害者たちである。終戦から 25 年目となる 1969 年、東京都立田中国民学校の第 16 回卒業式が 25 年目にして開催され、卒業生 100 余人のうち 40 人が拍手の中で卒業証書を受け取っている（【111】）。

#### 1969 年 10 月 27 日「25 年目の卒業式」【111】

「答辞 わたしたちの卒業式がある。このうれしい便りを聞いて、私は一週間前から眠れなかった。思い出します。疎開先の旅館の一室で、雪の降る夜、杉山先生はハチ巻きをして勉強しておられた。これはやらなくっちゃ。消灯後、試験の前、わたしたちは廊下の前の怪談の灯の下で勉強しました。それは余りにも可哀そうだと先生は炭火のはいった部屋をみんなに用意してくれました」一前に整列した三十六、七歳の卒業生たちは、肩をふるわせていた。（中略）

「戦争から敗戦、あの時代をやっと乗越えてきたぼくらの生活はむだだったろうか。充実感がなかったろうか。いや、そんなことあない。もう一度、歩いてきた道確かめてみたい。それが卒業式をやりたいという願いとなった」と酒井さんは答辞でのべた。

この事例を筆頭に、1970 年代から 80 年代にかけての時期には、戦中に卒業式を行えなかった世代による式のやり直しが、非常に多く見受けられる。これらの卒業式でとりわけ重視されているのは、卒業証書の授与・「上げば尊し」の斉唱・校長講話という、まさに同時期の学生運動が「意味のない形式」と見なした旧態的な儀礼である。人生の節目と思いつきの奪還を目指し、心の底から卒業式を望む彼らもまた、学生運動の中で生じた儀礼の創造とは逆ベクトルで、人生儀礼における形式に積極的な価値を見出した人々だったと言える。破壊と創造と復興、各々の観点から卒業式を構成する形式の価値が問われた時代、それが学生運動の時代であった。

【表1】「卒業式」関連記事一覧（1965年～1980年代）

（一条校以外の学校、皇族関連記事、卒業式自体を焦点としない記事、国外の事例を除く）

No.	年	月	日	記事名	種別
1	1965	2	24	水曜洋裁店：卒業式のお嬢さん	朝
2	1965	3	16	卒業式に国旗と国歌を 都教育庁全学校に通達	朝
3	1965	3	19	ある卒業式 クラス全員が珠算検定に合格	朝
4	1965	3	20	防衛大 晴れの卒業式	夕
5	1965	3	24	現代っ子感傷的に 都内の小学校で卒業式	夕
6	1965	3	25	史上最大の卒業式 日大	夕
7	1965	3	27	“社会の医師たれ” 大河内総長が告辞 東大卒業式	夕
8	1966	3	4	衣・装：おかあさん美しく 卒業式のおしゃれ	朝
9	1966	3	18	「学芸」除き卒業式 横浜国大問題	夕
10	1966	3	22	学芸学部が卒業式 横浜国大正常に	夕
11	1966	3	24	早大卒業式お流れ 一部学生の妨害を心配	朝
12	1966	3	24	春うらら 学園では卒業式	夕
13	1966	3	25	きょう学生主催の「卒業式」 早大四年生連絡協	朝
14	1966	3	28	社会の日陰なくせ 東大卒業式	夕
15	1966	3	31	天声人語	朝
16	1967	2	15	ニュース・グラフ：ホテルの光、など	夕
17	1967	3	4	「小市民となるな」 教委から異色の告示 都立高で卒業式	夕
18	1967	3	19	文京盲学校で卒業式	朝
19	1967	3	20	強硬派の学生が自主卒業式 しこり残る明大	朝
20	1967	3	22	さようなら水上小学校 消えた“日本ただ一つ”最後の卒業式	夕
21	1967	3	24	さようなら“6年” 卒業証書に花一輪	夕
22	1967	3	25	明大で二つの卒業式 尾を引く“学費紛争”	夕
23	1967	3	27	学外で卒業式 高崎経済大紛争	夕
24	1967	3	28	「権力より日陰を選べ」 東大卒業式 大河内総長が告辞	夕
25	1967	3	29	卒業式の中止で学生が自主集会 東京医科歯科大	夕
26	1967	6	11	星空の下で卒業式	朝
27	1967	6	29	やっとあす卒業式 国際基督教大	朝
28	1968	3	2	事前提出の送辞すりかえ 激しく政府攻撃	朝
29	1968	3	2	安積高でも文相批判	朝
30	1968	3	6	今日の問題：卒業式	夕
31	1968	3	22	卒業式を延期 登録医制紛争の順大医学部	朝
32	1968	3	22	卒業式場でヤジる 在校生締出しの佐賀大	朝
33	1968	3	22	今日の問題：議員出席	夕
34	1968	3	22	こっそり卒業式 「延期」発表後、ホテルで 順天堂大	夕
35	1968	3	25	女性が花形 大学卒業式	朝
36	1968	3	25	西と東で奥さん卒業	朝
37	1968	3	25	ニュース・グラフ：都内の小学校で卒業式	夕
38	1968	3	25	広島大、ついに分散卒業式 奨学金打切り紛争で	夕
39	1968	3	28	緊張の東大卒業式前夜 三派系すわり込み	朝
40	1968	3	28	東大の卒業式中止 医学部除き伝達式だけ	夕

41	1968	3	28	ニュース・グラフ：ヘルメットと晴着	夕
42	1968	3	28	異変、ひっそり安田講堂 卒業式中止の東大	夕
43	1968	3	28	警察の導入は避ける	夕
44	1968	3	28	社会の矛盾の解決には 秩序とルールを 辻法学部長あいさつ	夕
45	1968	3	28	総長室近くにバリケード 反代々木系学生	夕
46	1968	3	28	「暴力でとりやめは遺憾」 顔色さえぬ大河内総長	夕
47	1968	3	28	さらにミゾ深まる 処分問題で大学・学生側	夕
48	1968	3	29	天声人語	朝
49	1968	3	29	卒業式中止と東大紛争 根の深さ、さらけ出す	朝
50	1968	3	29	卒業式 関学大も一部中止	朝
51	1968	3	19	卒業式 東京医科歯科大も中止	夕
52	1968	3	30	社説：大学自治を脅かすもの	朝
53	1969	2	5	ニュース・グラフ：早々と“ホタルの光” 高校卒業式	夕
54	1969	2	25	高校卒業式にヘルメット 二校では会場を封鎖	夕
55	1969	2	25	“二人答辞”で混乱	夕
56	1969	2	26	警戒態勢など指示 大阪 卒業式妨害で府教委	朝
57	1969	2	26	今日の問題：卒業式	夕
58	1969	3	2	卒業証書破る 広島 高校の卒業式で総代	朝
59	1969	3	2	式の途中卒業生が退場 名古屋	朝
60	1969	3	6	答辞の生徒自主作成などを認める	夕
61	1969	3	8	すりかえ“送辞”で騒ぎ 東京・麻布高の卒業式	夕
62	1969	3	9	京大 卒業式にメド	朝
63	1969	3	9	卒業式に校長批判のたれ幕	朝
64	1969	3	10	在校生の前で卒業証書破る	朝
65	1969	3	10	卒業式にも“生徒参加”の波 東京都内の高校	夕
66	1969	3	10	卒業式を一時ピケで妨害 札幌医大	夕
67	1969	3	10	卒業式ボイコット 信大医学部	夕
68	1969	3	11	君が代斉唱めぐり混乱 足立高卒業式	朝
69	1969	3	11	紛争大学 卒業式、軒並みお流れ 東大では二年続き	夕
70	1969	3	11	浦和高で卒業式混乱	夕
71	1969	3	12	天声人語	朝
72	1969	3	12	警官出動も是認 都教委通達	朝
73	1969	3	12	学生が“自主”卒業式 協同組合短大	夕
74	1969	3	13	“自主答辞”中学校にも 呉市	朝
75	1969	3	13	卒業式に乱入、占拠	夕
76	1969	3	14	都立文教高校の卒業式 “妨害情報”で延期	朝
77	1969	3	14	高校生三人つかまる 武蔵丘高占拠	朝
78	1969	3	14	ニュースグラフ：卒業式でひと騒ぎの九段高	夕
79	1969	3	14	九段高も大荒れ	夕
80	1969	3	15	高校卒業式の混乱防げ 警視庁が通達	朝
81	1969	3	15	占拠で卒業式中止	夕
82	1969	3	15	“粉碎”叫び氣勢 静大では開会遅れる	夕
83	1969	3	16	高校問題に対策協議会も 都教育長答える	朝
84	1969	3	16	なぜ荒れる高校卒業式 形式主義へ反発	朝

85	1969	3	16	生きていた「蛍の光」 送辞にしんみり	朝
86	1969	3	17	ミニ・ドキュメント：今は昔「仰げば尊し」 当世風の高校卒業式	朝
87	1969	3	18	上野高で分裂卒業式 一部は校庭で討論集会	夕
88	1969	3	19	38校の高校中学で騒ぎ 都内の卒業式	朝
89	1969	3	20	天声人語	朝
90	1969	3	20	高校生450人がデモ “卒業式闘争”の打止め	朝
91	1969	3	20	討論集会やめて静かな卒業式に 新潟大文学部	朝
92	1969	3	21	予算面で配慮したい 荒れる高校卒業式で都知事	朝
93	1969	3	22	ニュース映画から：相反する高校卒業式を紹介	夕
94	1969	3	22	精強な自衛隊の創造を 首相 防衛大卒業式で訓示	夕
95	1969	3	23	卒業式に大衆討議を 早大法学部学生が要求	夕
96	1969	3	23	カラーニュース：晴着と反抗の卒業式	朝
97	1969	3	24	京大 全学統一の卒業式中止	朝
98	1969	3	24	大阪市大の卒業式中止 反代々木系が封鎖	夕
99	1969	3	25	京大 学部ごとに卒業式	夕
100	1969	3	25	壇上でなぐり合い 早大卒業式で学生衝突	夕
101	1969	3	26	総長告辞もわずか二分 大荒れの早大卒業式	朝
102	1969	3	26	ミニ・ドキュメント：ある卒業式	朝
103	1969	3	26	クラスごとに卒業式	朝
104	1969	3	26	九大の卒業式中止 学長事務取扱が決らず	夕
105	1969	3	26	卒業式妨害の四人無期停学	夕
106	1969	3	27	九大で分散卒業式 証書は後日郵送	夕
107	1969	3	28	ひととき：苦難の時に「晴着の卒業式」	朝
108	1969	4	1	無期停学を解除 茨木高校卒業式妨害の四人	朝
109	1969	4	2	都立武蔵丘高 生徒五人を停学	朝
110	1969	4	8	卒業式の校舎占拠で逮捕 武蔵丘高卒業生	夕
111	1969	10	27	25年目の卒業式 しんみり40人	朝
112	1970	2	5	高校の卒業式 簡素化に足並み	朝
113	1970	2	8	かたえくぼ：揺れる卒業式	朝
114	1970	2	10	人 その意見：実方亀寿（卒業式の簡素化を進める全国高校長協会常務理事）	朝
115	1970	2	15	“僕らインチキ卒業” 単位不足を暴露	朝
116	1970	2	18	卒業生代表が落第	夕
117	1970	2	20	今日の問題：卒業式とは 水戸一高の活動家	夕
118	1970	2	23	卒業式は生徒本位に “改革”にチエしぼる高校	夕
119	1970	2	25	講堂などから火炎ビン16本 大阪・三国ヶ丘高	朝
120	1970	2	25	インター歌い“抗議” 大阪の枚方高	夕
121	1970	2	25	卒業式場に殺虫剤 大阪清水谷高	夕
122	1970	3	2	高校卒業式シーズン入り 造反もチラチラ 日の丸めがけ墨汁	朝
123	1970	3	5	粉碎叫ぶ八人逮捕 東京農大一高の卒業式	夕
124	1970	3	6	「卒業式阻止」叫び投石 日体荏原高	夕
125	1970	3	7	卒業式でひと騒ぎ 都立四商	夕
126	1970	3	8	ミニ・ドキュメント：破壊はやさしいが創造はむずかしい 都立北多摩高の自主卒業式	朝

127	1970	3	9	一部生徒が校庭でデモ 井草高も卒業式	朝
128	1970	3	11	京大、今年も卒業式中止	朝
129	1970	3	11	昔 揚げば尊し 今 エレキ 文京高卒業式	朝
130	1970	3	11	告辞や授与式を全廃 宮城教育大 卒業式を総括集会に	夕
131	1970	3	15	「卒業式に“君が代”歌って」 東京・荒川区の尾久小 父兄が署名集め、要求	朝
132	1970	3	15	協組短大が卒業式中止 非組合員の学長に抗議	朝
133	1970	3	15	学芸大附属高も（卒業式中止）	朝
134	1970	3	16	戸山高の卒業式一時荒れる	朝
135	1970	3	17	卒業式「君が代斉唱」の時 クラス全員回れ右	朝
136	1970	3	18	東大入学式を中止 卒業式も三年続き見送る	朝
137	1970	3	19	警戒の教職員角材で“武装” 私立武蔵高	夕
138	1970	3	21	現代っ子も泣いた卒業式 月島第一小	朝
139	1970	3	25	卒業式の日、教師に乱暴 止めない級友	朝
140	1970	3	25	ニュース・グラフ：早大で分裂卒業式	夕
141	1970	3	25	十二人胸張って 山谷の小・中校で初の卒業式	夕
142	1970	3	31	「証書は事務室で」東大 今年もばらばら卒業	夕
143	1970	9	30	半年遅れの卒業式 京大医学部	夕
144	1971	3	27	ひととき：卒業式に思い出す昔の友	朝
145	1971	4	22	卒業式出席も拒否され監禁 教師らが生徒拘束、震える母親ら	朝
146	1971	11	16	ひととき：26年ぶりの小学校卒業式	朝
147	1972	3	6	「揚げば…」天井くずれ！東京の女子高 卒業式で12人けが	朝
148	1972	3	6	タイムカプセルに「青春」 卒業を記念埋める	朝
149	1972	3	15	教育：卒業式はだれのため 生徒たちは退屈 来賓向けの“ショー”化	朝
150	1972	3	19	天声人語	朝
151	1972	3	25	ニュース・グラフ：別れも、送るも、超ミニ卒業式	夕
152	1972	3	26	巣立ちの儀式 13万人さまざまに	朝
153	1972	3	26	特技・ユメ・アダナ… 若林小 じかがき文集配る	朝
154	1973	2	26	“戦災っ子”28年ぶり卒業式 本所の緑国民学校33期生	
155	1973	3	5	今日の問題：卒業式	夕
156	1973	3	5	高校卒業式を中止 担任から卒業証書	夕
157	1973	3	19	“水銀の青春”巣立つ 女性患者 判決を前に卒業式	夕
158	1973	3	26	卒業式にも川口君の“影” 早大 答辞“無策大学”つく	朝
159	1973	6	28	日本にきて卒業式 欧州経営大学院	朝
160	1973	7	13	首相も出席し卒業式 欧州経営大学院	朝
161	1974	1	17	果たされた十年目の再会 卒業式の約束忘れず	朝
162	1974	2	5	早すぎませんか、卒業式 大学受験に備え	朝
163	1974	3	5	春と卒業式 喜ばしく、そして寂しく	朝
164	1974	3	8	29年遅れの卒業式 築地小 疎開先で終戦の世代	朝
165	1974	3	8	戦争で果たせぬ夢 実現 29年ぶり卒業式	夕
166	1974	3	8	「卒業生」たちにお言葉をかけられる皇太子ご夫婦	朝
167	1974	3	9	「二十八年めの卒業式」子に伝える東京空襲の記録	朝
168	1974	3	23	防衛大卒業式で首相訓示	夕
169	1974	3	23	ニュース・グラフ：花に囲まれた卒業式 江戸川・鹿骨小	夕

170	1974	3	23	“中学校でまた会おうね” 都内小学校の卒業式	夕
171	1974	9	23	30年ぶりの“卒業式” 早大の学徒出陣組集う	朝
172	1975	3	18	ひととき：息子の卒業式に行けぬ私	朝
173	1975	3	20	一斉に卒業式 都内の小中学校	夕
174	1975	4	5	どっちが本当なの 二つの“卒業式”	朝
175	1976	3	13	家庭：卒業式と入学式のみもの 清水ときさんのアドバイス	朝
176	1976	3	20	31年ぶり各地で国民学校卒業式	朝
177	1976	3	21	政治不信解消に全力 防衛大学校卒業式	朝
178	1976	3	26	東北大、卒業式大荒れ 学生乱入	朝
179	1976	3	27	31年ぶり「仰げば尊し」二国民学校の39人	朝
180	1976	3	27	東大で卒業式	夕
181	1976	12	3	ひととき：しみじみ31年ぶりの卒業式	朝
182	1977	1	22	32年遅れの卒業式 あす、葛飾・旧中井堀国民学校の百余人	朝
183	1977	3	20	卒業式で「日の丸」反対 大森八中	朝
184	1977	3	24	京大の卒業式大荒れ 赤ヘル、学長式辞を妨害	夕
185	1977	3	26	最後の卒業式	朝
186	1977	3	28	「日米協力で核廃絶推進」防大卒業式で福田首相	朝
187	1977	6	20	32年ぶりの卒業式 台東区石浜小 58人が証書に涙	朝
188	1977	12	23	入学卒業式 国旗国歌義務づけ 町田 市議会で激論、決議	朝
189	1978	2	14	卒業式に「日の丸」「君が代」を 公聴会も教組も「迷惑な」	夕
190	1978	2	27	NEWS三面鏡：君が代論争一ある小学校で	朝
191	1978	3	12	ひととき：耐えて育てていま卒業式	朝
192	1978	3	18	自治医大初の卒業式	夕
193	1978	3	20	首相訓示も経済に力点 防衛大卒業式	朝
194	1978	3	20	防大卒業式でピラまく 中退の右翼学生	朝
195	1978	3	25	卒業式の朝 発煙けむる 聖マリアンヌ医科大	夕
196	1978	4	24	三十三年ぶり晴れの卒業式 品川・旗の台小	朝
197	1979	2	28	ひととき：卒業式、私は黒服を着ない	朝
198	1979	3	19	首相 防衛力整備に積極発言 防衛大で訓示	朝
199	1979	3	19	首相の訓示要旨 防大卒業式	朝
200	1979	3	19	様変わり援軍ズラリ 防衛大卒業式	朝
201	1979	3	19	中学に行けなかった青春 中年いま巣立つ	朝
202	1979	3	24	34年目いま「蛍の光」 苦しかった仲間たちが卒業式	朝
203	1979	5	10	「君が代」ジャズって免職	朝
204	1979	5	13	総代は“懲役15年生” 季節外れの中学卒業式	朝
205	1980	2	27	「君が代」歌わずレコードで（福岡）	夕
206	1980	3	16	カンどころ：卒業式入学式の服	朝
207	1980	3	23	こども百態：卒業式のサイン帳	朝
208	1980	3	24	「防衛力整備、着実に」首相、防大卒業式で訓示	朝
209	1980	3	24	今日の問題：雪が似合う卒業式	夕
210	1980	3	25	渦中の早大、卒業式「難しいが人を信じて」	夕
211	1980	3	28	ひととき：楽しい卒業式演出しよう	朝
212	1981	3	1	チャーム・アップ：入学・卒業式の和服	朝
213	1981	3	5	今日の問題：わるそう達	夕

214	1981	3	7	中野区教委 初会合、早くも論議 卒業式の出席めぐり	朝
215	1981	3	14	中野区の小中校卒業式 教育委員は祝辞自由	朝
216	1981	3	15	日曜談話室：最近の卒業式 クールに受けとめ 簡略化される方向	朝
217	1981	3	18	「力」借りて卒業式平穩 警官“臨席”200校が要請	夕
218	1981	3	20	厳戒下 ホタルの光 中学卒業式 警官1200人を動員	夕
219	1981	3	21	2千余人を補導 厳戒の卒業式、ほぼ平穩	朝
220	1981	3	22	社説：いま中学生にとっての卒業式	朝
221	1981	3	23	総合的な安保推進 首相、防大卒業式で訓示	夕
222	1981	3	23	ナウ！！はかま 卒業式に流行のきざし	夕
223	1981	3	24	先生しんみり生徒ニコニコ 都内小学校で卒業式	夕
224	1981	3	27	殴られた先生はなかったが…230校で“戒厳令”卒業式	朝
225	1981	5	5	沖縄戦体験(28)：日本一の卒業式	朝
226	1982	2	21	日曜談話室：最近の高校卒業式事情	朝
227	1982	3	6	ひととき：卒業式を焼いた東京大空襲	朝
228	1982	3	15	74歳いま巣立ちの春 平均50歳、一橋中通信課程で卒業式	朝
229	1982	3	17	番長ら50日自宅学習 中3ら卒業式まで“隔離”	朝
230	1982	3	18	丙午っ子、旅立つ 都内の中学校で卒業式	夕
231	1982	3	21	不正入試で学生ら騒ぐ 青山学院大卒業式	朝
232	1982	3	23	必要最小限で防衛力整備を 首相、防大卒業式訓示	夕
233	1982	3	24	校内暴力の二人、涙で卒業式 施設から帰り立ち直る	朝
234	1982	3	24	六年間通った校舎にお別れ 東京の小学校で卒業式	夕
235	1982	3	24	NEWS三面鏡：「日の丸」「君が代」卒業式 「他校にならぬ」復活	夕
236	1982	3	29	中・高校の卒業式 10校に1校へ警官	夕
237	1982	3	29	見事やろうぜ37年目の卒業式 下町っ子の心意気、裏方さん続々	夕
238	1983	3	6	女子大生にはかま人気 卒業式は復古調？	朝
239	1983	3	6	おつきあい事典(67)：卒業式・謝恩会	朝
240	1983	3	17	中学校の卒業式 警察への依存強まる 776校が警戒要請	夕
241	1983	3	17	警察・学校密着くっきり 中学卒業式の警戒	夕
242	1983	3	17	実に困ったところ 小尾席雄文教大学学長の話ほか	夕
243	1983	3	18	「蛍の光」窓には警官！？ 都内の中学	夕
244	1983	3	18	警官千五百人、三十校で警戒 PTAのパトロールも	夕
245	1983	3	18	あの忠生中も無事に卒業式 「重い看板」と校長	夕
246	1983	3	20	社説：警官のいる卒業式とは	朝
247	1983	3	21	たくましい自衛官期待 首相が訓示 防大卒業式	朝
248	1983	3	25	全児童に手作り写真帳贈る 名物校長、最後の卒業式	朝
249	1983	3	25	立大社会人入学1期生 感慨ひとしお卒業式	夕
250	1983	3	28	「校内に警官」1225校 中学卒業式	夕
251	1983	3	29	警察庁発表は1225校…文部省調べでは261校 実態は中間か	朝
252	1984	3	1	校内暴力再び増加 警察庁、卒業式を警戒	朝
253	1984	3	3	理事長は欠席 国士館卒業式	夕
254	1984	3	9	今日の問題：斐太の卒業式	夕
255	1984	3	12	ありがとう定時制の師よ友よ 最後の卒業式に立ち直り体験報告	朝
256	1984	3	15	焼跡派に39年ぶりの春 20年卒の東盛国民学校生	朝
257	1984	3	17	校長、卒業式で教育勅語暗唱 堺「十代の記憶力の良さを示した」	朝

258	1984	3	18	中学卒業式で38校を警戒 警視庁	朝
259	1984	3	18	中学苦悩の卒業式 ツッパリ18人自宅待機	朝
260	1984	3	19	「信頼される自衛隊」強調 防大卒業式で首相	朝
261	1984	3	24	警官立ち入り昨年の半分 中学校卒業式	朝
262	1984	3	24	「学生スポーツの快挙を糧に」アメフトの梅津君、総代	夕
263	1984	3	25	学徒動員立教ボーイ 四十年ぶり卒業式	朝
264	1984	3	27	エコー：卒業式の歌	朝
265	1984	3	28	「議論に強くなる勉強を」東大卒業式 平野学長が贈る言葉	夕
266	1984	3	29	立ち入り警戒校4割減 警察庁調べ	朝
267	1984	3	31	今月の投書から：卒業式の歌に思いそれぞれ	朝
268	1985	3	9	今日の問題：机洗い	夕
269	1985	3	18	「力の均衡論」展開 防大卒業式 首相が訓示	朝
270	1985	3	20	都内の中学549校で卒業式 警官、33校に派遣	夕
271	1985	3	24	公立中卒業式平穏に 警官警備は3割減	朝
272	1985	3	25	今日の問題：仰げば尊し	夕
273	1985	3	26	戦禍の"児童"39人も40年ぶりの巣立ち 台東・黒門小卒業式	朝
274	1985	3	28	東大で卒業式	夕
275	1985	3	29	中高の卒業式警備 文部省調べの八倍	朝
276	1985	7	6	40年ぶりの卒業式 吉村昭さんらに証書	朝
277	1986	3	2	沖縄の高校に「日の丸」 卒業式で復帰後初	朝
278	1986	3	8	卒業式	朝
279	1986	3	15	クスクススクール卒業式特集	夕
280	1986	3	20	都内の中学卒業式「いじめ追放」ガンバレ オヤジも立ち上がった	夕
281	1986	3	24	「国民と歩む自衛隊に」防大卒業式で首相訓示	朝
282	1987	2	21	変身はレンタルドレスで 「お嬢さま願望」の女子大生にうける	夕
283	1987	2	25	心に残るかナー、いまの卒業式 福武書店が全国の小学校調査	朝
284	1987	3	8	働き学びそしてたかかった ある定時制女子高の99人	朝
285	1987	3	11	見送る後輩なく 炭鉱の街で閉校式	夕
286	1987	3	16	卒業式は「ハカマ」で 復古調人気集める	夕
287	1987	3	20	天声人語	朝
288	1987	3	23	防衛力整備は質の高さ追求 防大卒業式で首相強調	夕
289	1987	3	26	卒業式に担任ら欠席 練馬の大泉東小「日の丸」掲揚で紛糾	朝
290	1987	3	28	東大も華やか卒業式	夕
291	1987	4	18	警察が守った卒業式は減少 ピーク時の二割に	朝
292	1987	4	25	卒業式欠席の20教職員処分 「日の丸」問題で都教委	朝
293	1988	2	26	卒業式の「日の丸」「君が代」めぐり対立 沖縄で卒業式	夕
294	1988	3	20	やり直しました国民学校 43年遅れの卒業式	朝
295	1988	3	22	専大卒業式に影落とす"幽霊学生" 学長が「信頼回復に全力」	夕
296	1988	3	22	防大で卒業式	夕
297	1988	3	29	試論私論：卒業式	朝
298	1988	4	5	卒業式から締め出し 静岡の富士宮二中	朝
299	1988	4	5	卒業式こそ教師の愛情感じ取らせて 遠藤豊・自由の森学園長の話	朝
300	1988	4	22	ニュース三面鏡：「ツッパリ外し」学校も苦悩 校則違反放置…非行に	朝
301	1989	3	1	「幸せは自分でつかむもの」 ベトナム難民グエン君きょう卒業式で答	朝



302	1989	3	3	スマイルの園で卒業式	朝
303	1989	3	10	沖縄の県立高 君が代 卒業式での斉唱わずか	夕
304	1989	3	17	丸刈りにしない代償に卒業式出席できず 岐阜の中3	朝
305	1989	3	18	焼け残った校舎で卒業式 空襲で欠けた友しのぶ	朝
306	1989	3	20	「暴力」変質静かな式 生徒間減り、対教師中心	夕
307	1989	3	23	日の丸をひきはがす 相模原 小学校卒業式で母親	夕
308	1989	3	25	南の島でボイコット騒ぎ 東京・小笠原	夕
309	1989	3	26	ひととき：深い感動「対面卒業式」	朝
310	1989	3	26	手話通訳 クラブで学び卒業式に間に合った！	朝
311	1989	4	12	卒業式	夕
312	1989	6	7	日の丸・君が代義務化 入学・卒業式だけ 文部省見解	朝